

## 地方の時代

東京12チャンネル「総理と語る」の一部

内閣総理大臣 大平 正 芳

神奈川県知事 長洲 一 二

評論家 高原 須美子

(昭和五十四年四月二十五日)

高原 統一地方選挙でも地方の時代という言葉がさんざん言われ、これは、長洲知事が言い出されたという事なんですよ、何か言葉の方がひとり歩きしてしまいましたね。地方の時代とかけてUFOと解く、心は正体不明ということなんだそうですが、そこで、まず元祖の長洲知事から地方の時代というのは一体どういう意味でおっしゃったのか、その辺を簡単に説明いただきたいわけなんです。

長洲 ネーミングは、確かに私かもしれませんが、そういう言葉がはやる雰囲気というか、総理も田園都市というふうにおっしゃっているように、火をつければぱっと燃え広がるガスは、日本中に充満していたと思いますね。それで、言い出した私自身が驚くくらい、言葉だけ上滑りする心配もありますけれども、地方ということを私なりに言えば、都会に対して田舎ということもあるかもしれませんが、人が現実に働き暮らしている現場という意味では、東京のここも地方だと思っんですよ。そういうものを

もつと大事にしなればいけない。

明治この方、百年余り欧米に追いつこうというので、追いつき型近代化をやってきて、富国強兵とか戦後の高度成長とか、そういう時代は、集権体制でエネルギーを中央へ集めるといふことで、うまくいったと思いますが、ウサギ小屋じゃありませんけれども、もう少し自分たちの暮らしをしつかり見詰める、そういうことになってきたんじゃないか。

ですから、私は決して統一地方選挙だから言っているんじゃないなくて、日本の社会全体のあり方の問題として、したがって、国政の場でもぜひ考えてもらいたいのですが、これから二十一世紀へ向かう日本国のあり方として、地方ということをもつと大きな軸に入れる必要があるんじゃないかと思つてます。これは一つの仮説ですが、日本のいまの大きな問題としては、国際問題がありますね。やれ資源がどうかというすべて外からのショックで動く世界の問題。もう一つは、都市とか農村とかの地方の問題ですね。だから、国家という物差しだけでそれにすべてを収斂させて考えていたのではもうだめで、世界、国家、地方、あるいは人類、国民、市民といいますが、この三つの物差しを絶えず意識しながらやって、いままでの集権的な仕組みを直していくというのが、われわれに課せられた歴史的課題じゃないかと思つてます。

決して地方自治体が金に困っているから金が欲しいというような狭いことじゃなくて、これから二十一世紀へ向かう日本社会全体のあり方の問題として、したがって、これは、ぜひ国政の段階でもマスコミュニケーションでも、全国的な問題として、一種の新しい文明モデルを日本の中につくる、それくらいの広い視野で地方の時代ということは考えていただきたいと思つています。

高原 非常に歴史的・哲学的に考えていらつしやるわけですね。大平総理の田園都市構想というのも、拝見しますと、そういうかなり長期のしかも哲学的なお考えのようなんですが、いまの長洲知事の地方の時代と大平さんの言われる田園都市構想は同じと思つてよろしいでしょうか。

大平 全く同じですね。さらにもう少し補充して言えば、地方というのは長洲さんも言われたとおり東京にもあるわけで、つまり地方というのは地域的に中央から離れているという意味じゃなくて、一般に対する特殊というか、普遍に対する個性というか、そういうものですね。そういうものをわれわれがものを考える場合には必ず考へて、個性あるいは特殊性を生かすということにならんと本物にならんわけですね。

長洲さんが言われたように、明治以来、百年余のこの近代化の過程で、特殊とか個性とかいうものにはばらく遠慮してもらつて、中央の都合でやつてきましたわね。それは、ある程度許されたことだけれども、もうそういう時代は終わったということと、それから戦後大きな民族移動がありましたね、神奈川県なんかばかりに人が集まつて困つておられるんでしょうが、その人間の移動に伴つて、応急的にいろいろな措置を講じなければならなかつたこともよくわかるけれども、ここで本来の姿で一遍この地方の個性なり特殊性を生かして、本当の意味の政治あるいは行政をやるにはどうしたらいいかということを考えなければいけません。そんな時期がきたと、そう思つて私は田園都市の構想というものをいま提示したんです。

ただ、これは何か新しい政策をやれというんじゃないんです。いま現にいろいろなことを国もやり地方もやつておりますけれども、そういうようなことを一遍とらわれない立場で見直して、もう少しこの点は進めなければいかんとか、これはやめたらよからうというようなことを考へる考へ方の観念をちよつと整

理して、それで物差しをきちんところ持って、それでいまある状態を一遍見直してみようじゃないかと言っているんです。

だから、みんながいろいろやっておるところへ、今度、新しく大平がまたこんなものを持ち込んできていうことでは絶対ない。そんな私は大それたことをやるうとしておるんじゃないので、みんなが一所懸命やっておられる中で、しかし、皆さん物は相談だが、ここは一つこうする方が本当の個性を生かすゆえんになるんじゃないですかと、こんなことをやりおると地方を殺してしまうんじゃないですかと、そういうことを、もう少しみんなが考え直す時期がきたんじゃないですかということを書いて、まず、スタートラインに立つておるところですから、いまから進めていかなければならんことです。

長洲 まったく総理のおっしゃるとおりだと思えます。やはりそういうひとつの文明観に基づいて、歴史的課題として、ぜひ、地方のあり方をとらえていただきたい。一遍にできるとは思いませんけれども、いままでのように画一主義じゃなくて……。

高原 そうですね、日本どこへ行ってもまったく同じということでは……。

長洲 ミニ東京、プチ銀座みたいでつまらないですから、やはり、個性と多様さと自律というのを中心にした社会の仕組みを、これから十年、二十年かけてつくっていくという、そういうことをぜひ考え方として確立したいと私は思います。

それともう一つは、今回、これだけ地方の時代という言葉が普及したわけですからね、みんな政治家も言いますし、マスコミユニケーションも全部いっせいに取り上げてくださった責任があると思っんですよ。

私も責任がありますけれども、総理も責任がある。だから、一歩でも具体化へのステップをやはり踏み出さないと。これCMソングみたいに消えてしまっただけは困る。

高原 そうですね。キャッチフレーズだけで終わってしまったのはね。

長洲 そういふ点で考えますと、私はやはり総理にもよくおうかがいしたいんですけれども、田園都市といつても、それは何かこう工場と緑があると、それは大変結構なんですけれども、そういう物の面よりもそういうものをつくり出していく仕組みですね、行政なり政府なり経済なりのソフトウェアというんでしようが、仕組みを直さないと、何か田園都市づくりというので中央の政府がプランを立てて、どこに何カ所つくと、そうすると、自治体の方は早く指定してもらおうというので、東京に陳情に駆けつけて補助金をつけてもらってやるというのだと、つまり、列島改造論にちよつと植木をつけたという形になっちゃいますね。私、地方の工コで言っているつもりはありませぬけれども、地方の自発性が生きるような仕組みですね、これを何かの形で制度としてつくらないと、かけ声だけで終わるんじゃないかと思えますね。

大平 それは、仰せのとおりで、京に田舎ありと言いますが、東京に、このころ外国の方々が見えても、私も大勢お目にかかつてますけれども、非常に東京に魅力を感じると言われるんですね。クリーンで、あまり騒音が激しくなくて、緑が多くてすばらしいと言われるんですね。この良さというのは、やはり守っていかねければいかんし、情報であれ、文化であれ、都会の持つておる活力をどうすれば田舎に身につけてもらえるようになるのか、そのあたり、田舎は田舎で考えてもらわなければいかんが、いまやっておることはそういう方向から言つと逆行しておるんじゃないか、これはもつと見直さなければいかんのかな

いか、そういうことをいま選別をする時期じゃないかという点が、先ほど申しましたところですね。

同時に、要するにそれは実行しなければいかんわけですから、実行するにはそれだけの財源が要るし、それだけの行政力も技術力も情報収集力も全部考えてやらなければならんわけで、それは、私の方の責任でして、とりわけ、中央・地方を通じての財政のあり方については、財源の徴収の仕方から始まってその配分のやり方まで、これはそういう観点から、まず見直して改善にかからなければならんことだと思えます。それだけの用意をした上で、これはやはり一つ一つ改善に取りかかっていくという壮大な、これはいまからの仕事ですから、それをどこまでできますかね。まず、ここまではやり遂げたと、その次は長洲さんにしても、私にしても、次の方々に、ここまではやったからその次はひとつ頼みますよと言いたいものだと思っているんです。

長洲 私知事としての体験から申しますと、国家の財政が地方のそれ以上に、非常な危機だということ、私は経済学者だからわかりますから、ただ、金よこせということだけ言っても、説得力がないと思うんですよ。ただ、いまあるお金でも、もう少し使い方を地方の時代的にやればもっと生きるんじゃないか。たとえば、よくわれわれは議論するんですけども、国からの補助金ですね、これをただ増額してくれ、増額してくれと言うだけでは、国民も納得しないとあります。ただ、補助金の使い方をいちいちみために一件一件審査して、しょっちゅう東京の役所に日参して……。

高原 全部中央のひもつきでくるわけですね。

長洲 だから、私よく冗談に言うんですけども、多少誇張ですが、百万円の補助金をもらうために、人

件費が五十万かかって、交通費が二十万かかって、紙代が十万かかって、残るは二十万だと、こういう仕組みですね。これは知事会のある調査があるんですが、ある県で国道の改良事業を県が引き受けてやるのに、協議会数が一年間で九十七回、県の職員の出張が県内二百六回、上京のため三十八回、こうなんですからね。だから、本当にこういうのをたとえればひもつき一件審査じゃなくて、枠にして総合補助金制度にするとすれば、同じ百万円がそのまま生きてくる。こういう仕組みの改善は、これは別に増税しなくてもできるわけです。こういう点で、これは私たち自身もその気になりませんとね。口ではえらそうに補助金を整理しろと言いながら、実際には総理のところなんかへいつて補助金下さいよと頼み込む、そういう矛盾した行動を自治体側もやっています。それから、中央官庁にも縄張りがあるし、国会議員もやはり補助金を取ってくるということが地元へのサービスになつていくし、それから、団体といろいろ抵抗があつて一挙にはいかないでしょうけれども、漸次総合補助金化していくというようなことで同じ金をもつと効率的に使い、総理のおっしゃる通りにチーフガバメントにしていく。私はかなりそれは改善できると思いますね。それをやっただけでも、これは画期的なことになるんじゃないかと思ひます。

大平 やらなければ申しわけないと思つてます。私たちこれをいつまでにごうやります、ああ、やりますと言つて、いまだ大きな口たたたくほど自信ありませんけれども、早速取りかかつておりますので、漸次やるところを見ていただいて批判もしていただき、また、相当われわれを鞭撻していただくというようにお願いしたいものだと思つてます。

長洲 それと、総理にこんなところをお願いしちゃう申しわけないんですけども、私どもの方でも、県が

ら市町村に少し権限を移譲したいと思っておりますが、これも県が一方的にやったんじゃない受け皿の市町村の方が困りますから、協議しながらいまやっております。お互いに理解し合って、じゃあ、この仕事は現場の市町村におろしましょうと、そのかわり必要なお金はみましようという形ですね。ですから、国と地方との関係についても、私はぜひ話し合いの場所が、テーブルが欲しいんですよ。

今度、地方制度調査会が秋に国と地方との事務配分について、大変いい答申をお出しになるそうで、これは、ぜひ総理に実現していただきたいと思いますが、実際に法律なんかでも地方に影響あるのが、全然私ども口を出す暇なしに国会で決まっちゃって、仕事だけおいてくるということがありますので、もちろん自治省はしょっちゅう相談に乗ってもらいますが、自治省というんじゃないかと、政府と地方、知事会をはじめとして地方六団体でも結構ですから、内閣と地方団体の代表が、ときどき相談をするテーブルがあると、私どもがまを言うつもりはありませんので、かえってもくって陳情するみたいなことじゃなくて、そういうオープンな場でやるテーブルをつくっていただくと、大変進むんじゃないかと……。

大平 地方のためばかりでなく、国全体としてもチップガバメントになるようにしないといけないし、それは、国民にこたえなければいかんわけで、地方と中央とでキャッチボールしてあるだけではないいけないので、国全体がやはりチップガバメントというか、行政経費がうんと節減になるような方向にもっていかないと相済まないと思っております。